

幼保小 をつなぐ

架け橋プログラム

ハンドブック



啓林館

幼保小をつなぐ

架け橋プログラム

「架け橋プログラム」が動き始めています。

しかし、「架け橋プログラム」がどのような意味をもち、どのように実施していくべきよいかについては、まだピンとこないと言われる方もいるのではないかでしょうか。

そうした声にお応えするために、本冊子では「架け橋プログラム」の意義やその方法、幼児教育と小学校教育のつながりなどについて、分かりやすく整理しました。

下の図は、0歳から小学生までの子どもが、環境と関わりながら学び、成長していく姿を表したものです。

このように、子どもがたどっていく成長過程を見てみると、それぞれの年齢での経験の意味を捉え直すことができ、その後の道のりにつながっていく可能性が広がり、これまでとは違った景色が見えてくるはずです。

この冊子が、「架け橋プログラム」を考えていく際の手がかりとなるとともに、これから取り組もうとされている方々へのエールになれば幸いです。



岸野麻衣

福井大学教授



世界への探究は0歳から始まります。
子どもは、身の回りのものや人、
さまざまな出来事に出会いながら、
環境へ自ら関わっていきます。
こうした経験を重ねていくことが、
その後の学びや育ちにつながっていくのです。

目次

そもそも、架け橋プログラムって何？	2
特集1 座談会	
「一緒に始めませんか？架け橋プログラム」	4
幼児教育と小学校教育の特徴とは？	10
「幼児教育の終わりまでに育ってほしい姿」って何だろう？	12
つながっている！幼児教育と小学校教育	14
幼児教育に学ぼう！～小学校でも生かせる5つのポイント～	16
つなげよう！育てよう！幼保小連携の進め方	18
特集2 各地の実践紹介	
実践事例①（神奈川県横浜市）	20
実践事例②（滋賀県彦根市）	24
実践事例③（沖縄県南城市）	28
Q&A「素朴な疑問にお答えします！」	32

そもそも、

架け橋プログラムって何？

福井大学教授 岸野麻衣

近年、幼児期の教育の重要性が再認識されています。

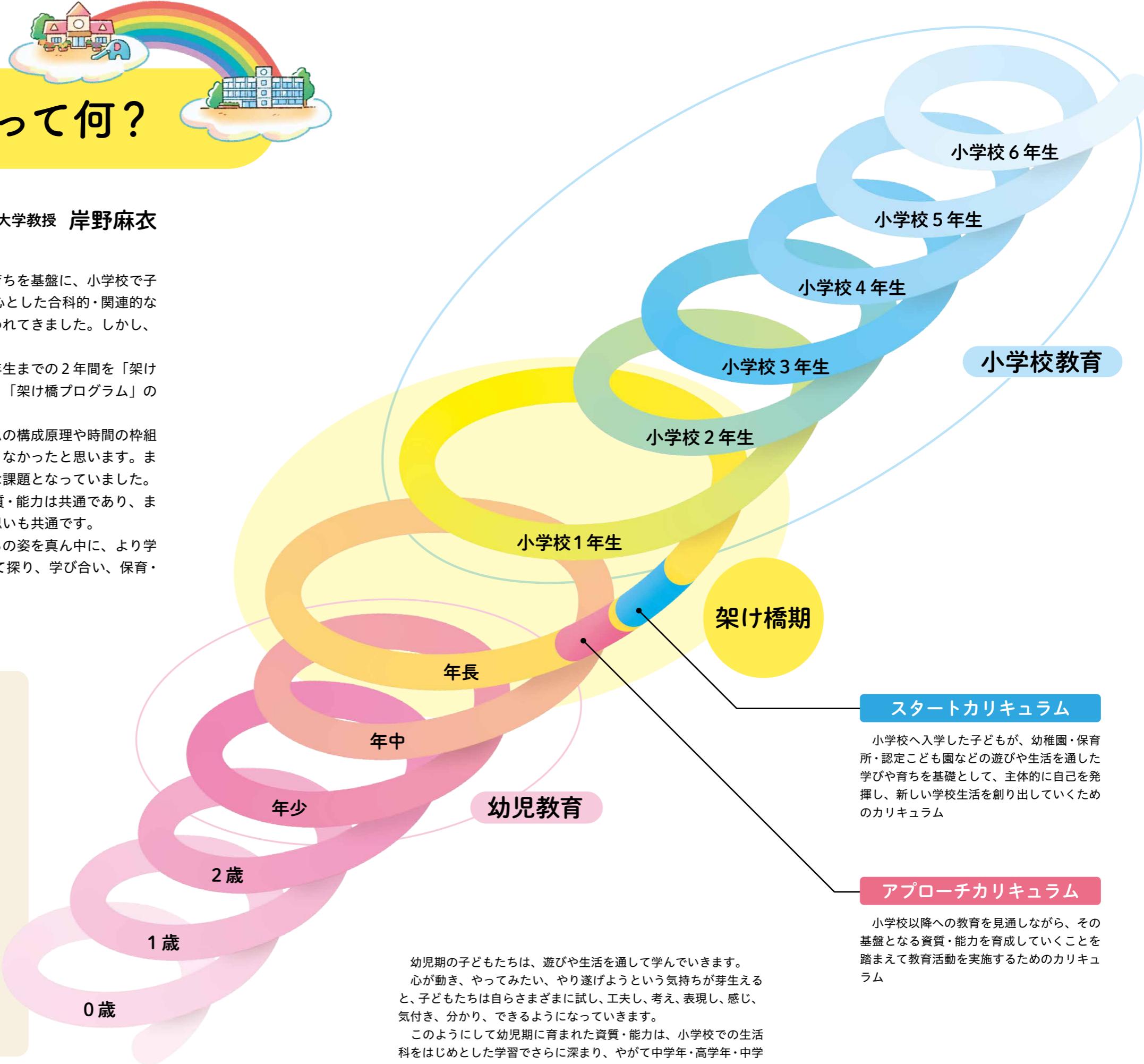
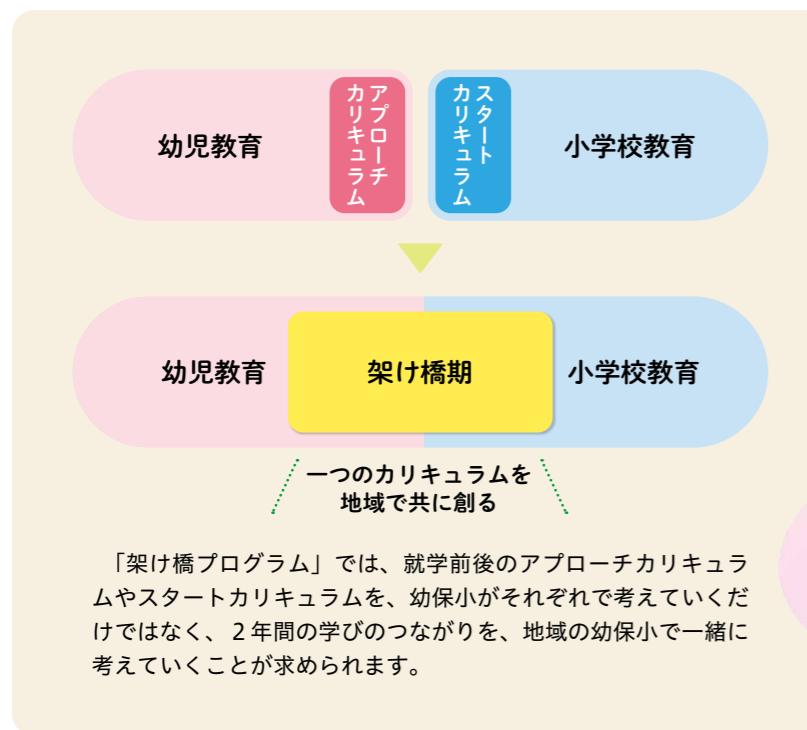
これまで、幼稚園・保育所・認定こども園等における学びや育ちを基盤に、小学校で子どもたちが主体的に自己を発揮していけるように、生活科を中心とした合科的・関連的な指導や、時間割の弾力的な運用などのさまざまな取り組みが行われてきました。しかし、これらの取り組みもまだまだ十分だとは言えません。

そこで現在、小学校入学時期だけに留まらず、5歳児から1年生までの2年間を「架け橋期」として、地域の幼保小が協働して教育課程を編成していく「架け橋プログラム」の取り組みが進められています。

これまでの幼保小の接続に向けた取り組みでは、カリキュラムの構成原理や時間の枠組み、評価の仕方などについて、お互いの違いに戸惑う声も少なくなかったと思います。また、さまざまな立場の人々が協働するための体制づくりも大きな課題となっていました。

しかし、幼児教育も小学校教育も、子どもたちに育みたい資質・能力は共通であり、また日々教育活動に取り組む大人たちが子どもたちの成長を願う思いも共通です。

幼保小でのお互いの豊かな経験を持ち寄りながら、子どもたちの姿を真ん中に、より学びと育ちが豊かになっていくにはどうしたらいいのかを協働して探り、学び合い、保育・教育の質を高めていくことが求められているのです。





横浜市立東本郷小学校 校長
堂腰康博先生

横浜市立高田小学校
高山希子先生

國學院大學教授
吉永安里先生

東京都品川区立台場幼稚園 副園長
親泊絵里子先生

RISSHO KID'S きらり岡本 園長
坂本喜一郎先生

一緒に始めませんか？ 架け橋プログラム

座談会

「架け橋プログラム」に興味はあるのですが、
何から始めればよいか分からぬという声をお聞きします。

そこで、幼稚園、保育所、小学校、大学とさまざまな立場
で活躍されている5名の先生にお集まりいただき、
「架け橋プログラム」の現状や今後の取り組み方について
語り合っていただきました。

子どもたちの豊かな学びの実現のために、
一緒に「架け橋プログラム」を始めませんか。



撮影協力:RISSHO KID'S きらり岡本
東京都世田谷区の閑静な住宅街にある「きらり岡本」保育園。木材をふんだんに使用した園舎や緑豊かな園庭のあちこちには、夢中になって遊ぶ子どもたちの姿がありました。

架け橋プログラムの 取り組みについて

吉永 幼保小をつなぐ架け橋プログラムが各地で進められています。まずは、皆さんの園や学校における取り組みやその成果についてお話をいただきたいと思います。では、坂本先生からお願いします。

坂本 私はもともと小学校の教員だったのですが、当時は低学年を担任する機会が多く、生活科などの教材研究にも熱心に取り組んでいました。また、一貫校だったこともあり、幼稚部の先生と連携研究も行っていました。幼稚部との連携を進めるうちに、幼児教育の「遊びを通して主体的にやりたいことをやる」ことの素晴らしさに魅せられ、気が付いた

ら幼稚部に移籍していました。その思いが、今の「きらり岡本」の設立にもつながっています。

世田谷区は幼保小の連携に熱心に取り組んでいて、中学校区ごとに学び舎グループがあります。現在、私が関わっている学び舎グループでは、小学校、中学校も交えて非認知能力の合同勉強会を進めています。非認知能力をはじめとする子どもの成長は、幼児期から小学校・中学校へつながっているからです。

吉永 幼児期の子どもたちが、遊びを通して主体的に学んでいることを、小・中学校の先生たちも理解してくれるようになってきました。この新しい風をさらに広げていくことが、今の私の夢です。

吉永 ありがとうございます。続いて親泊先生、いかがでしょうか。

親泊 私の勤務する幼稚園は小学校と同じ建物の中にはあります。その強みを生かすために、「架橋研」という研究会を立ち上げて、幼小の先生が相互参観したり、協議したりする場を継続的に積み重ねています。

成果 としては、協働して保育・授業づくりを考える仕組みができ、そのことで子どもの見方が広がったり、深まったりして、それぞれの実践の改善につながっていることがあります。

小学校の先生と具体的な子どもの姿を通して協議することで、新たに子どもの力を捉えたり、教材の意味を考えたりする視点をもらえたこと、ただ「～を楽しんでいました」ではなく、幼児が遊びを通して学んだり経験したりしていることを、発信していく術を学ぶことができました。



園内には材料コーナーや道具コーナーが設けられています。
1人の子どもが、夢中になって何かを探していました。

幼稚園の先生は、子どもの内面や心情を考える方向に行きがちですが、小学校の先生と関わることで、子どもの力や教材の意味を考えることや、保護者や外部の方に発信していくことの大切さに気付くことができました。

吉永 ありがとうございます。幼児教育の立場から2人のお話を伺いましたが、研究会などの組織づくりを通して少しずつ連携が進んできたという点が共通していたと思います。では、小学校教育の立場から、高山先生、お願いします。

高山 昨年まで横浜市の東本郷小学校で勤務していたのですが、そこで自分が大きく変わることになったいくつかの経験をご紹介します。

まず、生活科の秋の单元で、どんぐりの取り扱いをやめたことです。これまで、教科書通りに授業を進

めることができたのですが、昨年の秋の单元では、どんぐりではなく「石のはくぶつかん」という実践をしました。子どもが本当にやりたいことから活動を始めることで、活動自体が次々に発展していきました。(※この実践についてはp.20で詳しく紹介しています)

また、幼稚園や保育所での経験を子どもたちに聞くようにしました。子どもたちは予想以上にいろいろなことを知っていて、小学校のやり方を押し付けるのではなく、「自分たちはどうしようか」と考えさせることを大事にしました。

あとは、本日お越しの堂腰校長先

生が、近隣の幼稚園・保育所との交流の機会をつくってくださったことです。例えば、鴨居保育園の園児たちと交流した際、飼っているおたまじやくしがすぐに死んでしまい困っていることを聞いた子どもたちは、おたまじやくしのことを本にまとめて

園児たちにプレゼントしました。また、鴨居保育園の園児たちと一緒に水遊びをしたときには、園児たちのダイナミックな遊び方を見て、逆に小学生の方が刺激を受けていました。

吉永 ありがとうございます。校長先生が幼稚園や保育所とつなげる機会を設けてくれたという話がありました。堂腰先生、管理職としてはどのように学校経営をしていけばよいでしょうか。

堂腰 横浜市はもともと、幼保小の学びのつながりを大切にする土壤があって、交流や研修会も盛んでしたが、本当に顔の見える関係で子どものことを語り合っているかというと、そうでもありません。

そこで、東本郷小学校では周辺の幼稚園や保育所の先生たちにお声がけして、架け橋プログラムの研修と一緒に進めています。子どもにとつて大切なことを語り合い共有するとともに、授業そのものを変えていくことが大切だからです。スタートカリキュラムが終わったら、あとは今までと同じというのではなく、架け橋期の学び方を生かして1年生、2年生、3年生以上へと学びをつなげていく。校長はそういった視点をもって、学校経営を進めていく必要があると思います。

また、幼児教育に学ぶためには、幼稚園や保育所の保育を観にいくことをお勧めします。その際、遊びが自発的な活動になっているような質の高い保育を観ることが大事です。そうすることで、小学校の授業も変わってくるはずです。

吉永 重要な視点だと思います。授業を改善していく際に、環境構成や方法論だけでなく、授業観や子ども観も変えていく。そうすれば、授業自体も変わっていくのではないかでしょうか。

幼児教育と小学校教育をつなげていくために

吉永 幼保小の相互理解についての話が出てきましたが、幼保小で子どもの育ちをつなげていくためにはどうしたらよいと思いますか。親泊先生、お願いします。

親泊 「架橋研」をやっていて、最初は幼稚園と小学校の違いに目がいきがちでしたが、研究を進めるにつれて共通点も多くあることに気付きました。

架け橋期において、幼稚園から小学校へと環境は大きく変わりますが、保育・授業づくりにおいて子どもが思いや願いをもてるようにすることは同じです。また、子どもの興味・関心、好きなものを生かしたり、これまで体験したことと関連させながら考えたりして学んでいく点も共通だと思います。「つなげる」ために何か特別なことをするのではなく、



幼児教育と小学校教育には、違いばかりではなく共通点も多くあることに気付きました。

(親泊先生)

幼保小それぞれが日々の教育活動を充実させることによって、両者はおのずとつながっていくと思います。

吉永 ありがとうございます。次に坂本先生、お願いします。

坂本 幼稚園や保育所、小学校を見学させていただく機会が多いのですが、園や学校に入って5分もすれば、そこでどういう保育や教育が行われているのか分かります。教育方法がどうこうという以前に、そこにいる子ども一人一人が自分らしく輝いていれば、間違った教育はしていないのだと思います。

よく小学校の指導案に「子どもに～させる」と書かれています。しかし、子どもは「したいからする」のではないでしょうか。こういった違和感をお互いに伝え合うことも大切です。お互いを見てお互いを知ることで、連携は深まっていくと思います。

「こんなに自由に遊ばせていて、子どもたちはまとまるのですか?」という質問を受けることがあります。しかし、子どもたちは興味のあることであれば、自然にまとまるのです。だからこそ、子どもたちを力強くでまとめるのではなく、聞きたいとか、見たいとか、参加したいとか、そういう人間らしい気持ちを大事にしていきたいと思います。

吉永 ありがとうございます。続いて高山先生、お願いします。

高山 私がいつも意識していることは、子どもたちは今、何に興味をもっているのかということです。先ほど、「石のはくぶつかん」の話をしましたが、最初はある子どもが石を持ってきたことから始まりました。やがて、それに興味をもった子どもが増えていき、「石のはくぶつかん」と広がっていきました。



子どもたちは、興味のあることであれば、自然にまとまるのです。

(坂本先生)

その前年は、紙飛行機が大好きな子どもがいて、だんだんとクラスに広がり紙飛行機大会が始まりました。やがて、紙飛行機だけではなくフリスビー、ピヨンピヨンガエル、凧なども加わっていき、最終的には「とべとベランド」を作り、いろいろな人を招待する活動にまで発展していました。このように、毎年子どもが変われば活動も変わるのであります。

子どもたちは興味のあることであれば、発見したことを伝えたいな、相手にどんな言葉で伝えようか、などと、活動がどんどん深まっていきます。また、石がたくさん集まれば、数えてみたいなどというように、算数学科などの他教科の学習にもつながっています。

高山 小学校はクラスの人数も大きいので、どうしても一斉指導になりますが、高山先生の実践のように、1人の子どもの強い思いが周りの子どもたちを惹きつけ、協働的な学びにつながっていく様子は、授業づくりにおいて大きなヒントになると思います。



学校が子どもたちにとって
楽しい場所であり、
なりたい自分になる場所で
あってほしいと思います。

(堂腰先生)

今、担任の立場からお話をいただきました。では、堂腰先生、学校全体で考えた場合、管理職としてはどうしていけばよいでしょうか。

堂腰 低学年では、生活科を中心にして教科横断的に学べるような指導計画を作っています。生活科を柱にして活動を進めていき、今年やってみてよかったですと思うことをワンポイントアドバイスとして書いておいて、来年につなげていく。そういう年間指導計画を作っています。それから、学校だりなどを活用して、常に職員や保護者にメッセージを発信し続けています。例えば、子どもの面白い発言とか、私とのやりとりなど、気がついたことは何でも書いています。

高山 私は、堂腰先生が「ちゃんとしてなくてもいいんだよ」とおっしゃってくださったことが心に残っています。それは、「ちゃんとして

なくてもいいから、やりたいことをやらせてあげよう」という意味ですが、子どもはやりたいことであれば、自分で考えて動けるようになるのだと思います。

吉永 それは素敵な話ですね。では、坂本先生、いかがですか。

坂本 人間はやりたいからやるのだし、憧れと出会うと自然にやり始めると思います。だから、私たちの最近のテーマは、保護者も巻き込んで、やりたいことをやれる「かっこいい大人」になることです。何かを教える大人ではなく、子どもが真似したくなるかっこいい大人です。そのためには、私たちも自分らしく生きることが大事で、自分らしく生きるために何を大事にすればいいのかを考えることが必要なのだと思います。

これから取り組もうとしている方々へのメッセージ

吉永 ありがとうございます。最後に、これからかけ橋プログラムに取り組もうとしている方々に、メッセージをお願いします。

親泊 今日の座談会においても、保育小のさまざまな実践に触れて、本音で子どものことを語り合えたことが楽しかったです。私は、かけ橋期の子どもたちの感じ方・表現の仕方には、この時期ならではの魅力がたくさんあると感じています。子どもの育ちを語り合い、共有できる仲間が広がっていくことの楽しさを、皆さんも感じていってほしいと思います。

吉永 ありがとうございます。続いて坂本先生、お願いします。

坂本 いきなり何かをすることはできないので、まずは、お互いがお互いのことを知ろうとすることが第一歩だと思います。小学校の先生がとても忙しいことは分かっています。だからこそ、私たちの方が柔軟性をもって小学校に足を運ぶということはできると思います。私たちが小学校教育に興味をもっている姿勢を見せていけば、一気に距離が縮まります。難しく考えずに、まずはできるところから始めていけばいいと思います。

吉永 まず、自分ができることをしていくということですね。続いて高山先生、お願いします。

高山 子どもたちが楽しんでいるところちらも楽しくなるので、子どもたちと一緒に楽しめばいいと思います。やりたいと思ったことに挑戦して、うまくいかなくても、今度はこうしようと考えていくのは、大人も子どもも同じです。だったら、みんなの迷惑になるのでは…などと難しく考えないで、子どもたちと一緒に楽しんでもらえればいいと思います。



あまり難しく考えないで、
子どもたちと一緒に楽しんで
しまえばいいと思います。

(高山先生)

吉永 ありがとうございます。最後に、堂腰先生、お願いします。

堂腰 学校は子どもたちのためにあるものです。学校が子どもたちにとって楽しい場所であり、なりたい自分になれる場所であってほしいと思います。だから、幼児期の子どもたちのいきいきと遊んでいる姿やエネルギーを、学校が潰してはダメだと思います。

かけ橋プログラムについても、熱心に取り組んでいる先生が異動してしまったら、後が続かなくなるようでは困ります。やはり、持続可能なシステムをつくることと、私たち教師一人一人が子どもに対する見方や教育に対する価値観を変えていかなければならぬと思います。

吉永 ありがとうございました。

本日は座談会の会場として、きらり岡本保育園という子どもたちの遊びの場を使わせていただきました。おかげで、子どもたちの息遣いを感じながら、内容を深めていくことができたと思います。

快く会場を提供してくださった坂本先生、貴重な事例を提供してくださった、親泊先生、高山先生、堂腰先生に、改めて感謝申し上げます。



環境構成や方法論だけでなく、
教育観や子ども観も
変えていくことが大切
なのではないでしょうか。

(吉永先生)



きらり岡本では、空前のバンドブームが到来していました。もちろんステージ衣装も楽器も、子どもたちの手作りです。



幼児教育と小学校教育の特徴とは？

幼児教育と小学校教育には、一見すると教育観や評価観、指導方法など、さまざまな違いがあるように見えます。しかし、子どもの年齢や発達の段階によって学びの内容や方法は異なるものの、学びの方向性については、幼児教育から小学校教育、さらにはその先の教育においても一貫しています。

ここでは幼児教育と小学校教育について、それぞれの違いや共通点を見ていきましょう。



幼児教育と
小学校教育をつなぐ
架け橋プログラムの
考え方

教育観	子どもの直接体験と多様な領域や教科のつながりある学びを重視する。
評価観	A/B/Cのような画一的な段階評価ではなく、子ども一人一人の学びの多様性を学びのねらいに則して記述的に捉える。
指導方法	(幼)個の興味・関心に応じた協同的・探究的な活動 (小)生活科を核とする合科的・関連的な指導
教師等の関わり	子どもが環境に直接関わる中で生まれた気付きを、多様な領域や教科の学びにつなげる指導。
学びの自覚性	幼児期後半から活動への見通しや活動の振り返りを大切にすることで、徐々に学びの自覚性を高める。

	幼児教育	小学校教育
教育観	子ども一人一人の経験を重視	学習内容の配列と指導の系統性を重視
評価観	方向目標	到達目標
指導方法	遊びを通した総合的な指導	教科書、教具等を用いた教科・領域ごとの指導
教師等の関わり	環境を通した間接的な指導	教師の発問・指示による直接的な指導
学びの自覚性	学びの芽生え	自覚的な学び
法令	幼稚園教育要領 幼保連携型認定こども園教育・保育要領 保育所保育指針	小学校学習指導要領
カリキュラムの構成	関連し合う5つの領域のねらいと内容 	各教科等における目標及び内容
資質・能力	知識及び技能(の基礎)、思考力・判断力・表現力等(の基礎)、学びに向かう力・人間性等	
学びの姿	主体的・対話的で深い学び、個別最適な学び(一人一人の特性に応じた指導)、 協働的な学び(協同的な活動)	

(幼児教育と小学校教育をつなぐには？)

p.10のように、幼児教育と小学校教育には違いもありますが、子どもの資質・能力を「主体的・対話的で深い学び」の中で育むことができるよう、「一人一人に合った方法で他者と協働的に学ぶことを重視する」という点は一貫性をもっています。

幼児教育と小学校教育をつなぐためには、まず子どもたち一人一人の実態を把握することが大切です。「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を幼児教育側と小学校教育側で共有することで、幼児期に育まれた資質・能力が、環境と保育者の援助の中でどのような姿となって見えてくるかが分かります。

両者の違いや一貫性を十分に理解することで、子どもの実態に即した連続的な指導を考えることができます。

幼児教育では

子どもたちが小学校に進学しても多様なことに関心をもち、自覚的に学んでいくことができるようになります。そのためには、友だちと目的を共有しながら協働して遊んだり、「もっと知りたい」「もっと考えてみたい」と探究的に活動に取り組んだりすることができるよう、日々の指導を工夫していく必要があります。



小学校教育では

子どもたち一人一人の興味・関心に合わせた活動を、見通しをもって協働的に行う中で、資質・能力を育んでいくことが大切です。そのためには、幼児期の遊びを通した学びのあり方と、その中でどのように資質・能力を育んでいるのかを知る必要があります。

幼児教育の環境構成や保育者の援助を参考にしながら、単に学習を遊びに置き換えるということではなく、遊びを通した学びの意義や方法の意味を知り、学習活動に取り入れていくことが重要です。



写真:与那原町立阿知利保育所、沖縄県南城市立大里北小学校

具体例でさらっと解説!

「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」 って何だろう?

「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」とは、幼児期にふさわしい遊びや生活を積み重ねることによって、幼児期の教育において育みたい資質・能力が育まれている子どもの具体的な姿であり、特に5歳児後半に見られるようになる姿のことを指します。具体的な姿が10項目にまとめられていることから、「10の姿」と呼ばれることもあります。

「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」は到達目標ではありません。そのため、達成を目指して個別に指導するものではないことや、一人一人の発達の特性に応じて育っていくものであり、すべての子どもに同じように見られるものではないことなどに留意する必要があります。

ここでは、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」について、具体例を交えながら解説していきます。

幼児教育の3つの柱、5領域、10の姿とは? //

3つの柱

「知識及び技能(の基礎)」「思考力、判断力、表現力等(の基礎)」「学びに向かう力、人間性等」の3つの「育みたい能力・資質」を指します。生涯を通して必要になる“生きる力”であり、「幼稚園教育要領」「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」「保育所保育指針」だけでなく、小・中・高校の「学習指導要領」もこの3つの柱で育みたい資質・能力が統一されています。

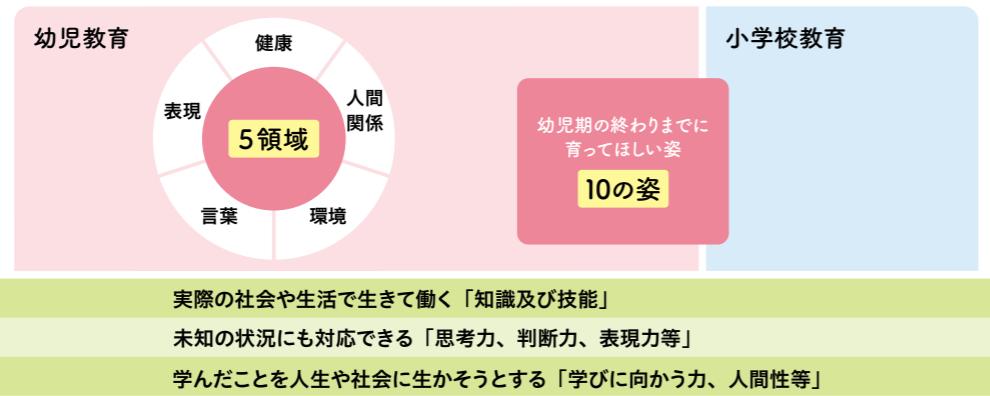
5領域

幼稚園教育要領等で示された保育内容のねらいと内容のことをいい、「健康」「人間関係」「環境」「言葉」「表現」の5つに分類されています。「5領域」は、「3つの柱」を育てる具体策といえます。

10の姿

「5領域」を通して資質・能力がどのように育っていくのかを具体的な姿として整理したものです。「10の姿」は資質・能力の現れであって、ねらいや内容、到達目標ではありません。

幼児教育の3つの柱、5領域、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿(10の姿)」の関係



その他の疑問はQ&A (p.32)へ! >>



久龍和巳
徳島県阿南市立
見能林小学校 教頭

1 健康な心と体



今日は
いっぱいおだんご
を作るぞ!

健康や安全に気をつけながら、自分の
やりたいことに向かって、取り組む。

2 自立心



おだんご作るの
けっこう大変…

自分の力で行うために考えたり工夫し
たりしながら、諦めずにやり遂げる。

6 思考力の芽生え



かたくて白く
なってきた!
ふしぎだな…

物との関わりの中で、物の性質や仕組
みについて考えたり気付いたりする。

3 協同性



一緒に
作ろうか?



ありがとう!

友だちとの関わりを通して、楽しみな
がら一緒に遊びを進めていく。

9 言葉による伝え合い



もっときれいな
おだんごに
したいな。
かざりを
付けたら
どうかな?

イメージや考えを言葉で表現しなが
ら、友だちと心を通わせる。

8 数量や図形、標識や 文字などへの 関心・感覚



わあ、
いっぱい
だね!

うん。
1, 2, 3...

自分たちに関係の深い数量に関心をも
ち、必要感をもって数える。

4 道徳性・規範意識 の芽生え



スコップ1つ
貸して。



いいよ!

相手も自分も気持ちよく過ごすために、
友だちと折り合いをつけ、自分の気持ち
を調整する。

7 自然との関わり・ 生命尊重



園庭にあったよ。
きれいな色!
何だろう?

季節の草花や木の実などの自然の素材
を遊びに取り入れたり、自然の不思議
さを感じたりする。

5 社会生活との関わり



あのかわいい
お花の名前、
図鑑で調べたの。
イヌタチ

目的に必要な情報を得て友だち同士で
伝え合ったり、情報を活用したりしな
がら活動する。

10 豊かな感性と表現



さまざまな素材の特徴や表現の仕方などに
気付き、イメージ豊かに楽しく表現する。

遊びの中から見取る

「幼児期の終わりまでに育てほしい姿」

イラスト:久龍和巳

つながっている!

幼児教育と小学校教育

幼児期の遊びを通した学びと、生活科をはじめとする小学校の教科学習。まったく異なるように見える両者ですが、実はさまざまな共通点やつながりがあります。例えば、どちらも子どもの「やってみたい!」「どうしてかな?」「こうなるのかもしれない」と心と体が自然に動き出す活動を大切にしています。また、自分のペースでじっくりと遊んだ園での経験をもとに、小学校においても、自分の思いや考えを友だちと伝え合いながら、見通しをもって主体的に活動に取り組むことができるようになります。

ここでは、幼児教育の活動事例(生き物との関わり)と1年生の生活科の活動事例(栽培活動)を対比させながら、その学びの共通点とつながりを見ていきましょう。



宮城利佳子
琉球大学講師

幼児教育 生き物との関わり

4月 おたまじやくしを見付けたよ!

せせらぎ(小川)にいるおたまじやくしの存在に気付きました。どうやったら捕まえられるかな。先生に用意してもらった網やバケツを使ってみよう。

思考力の芽生え

自然との関わり・
生命尊重



5月 もっと知りたい!

捕まえたおたまじやくしをみんなで保育室に持ち帰り、じっくり観察しました。小学生が「図鑑を見るといいよ」と図鑑の使い方を教えてくれました。

協同性

思考力の芽生え



6月 新しいおたまじやくしが生まれたよ!

図鑑に載っていたおたまじやくしのたまごを見付けて大喜び!思っていたよりたくさんのおたまじやくしが生まれて驚きました。家からえさを持ってきてお世話しています。

思考力の芽生え

自然との関わり・
生命尊重



6月 育ててみたい!

先生が保育室に観察・飼育コーナーを作ってくれました。図鑑でおたまじやくしの育て方を調べたり、虫眼鏡やペンライトを使って観察したりしました。

思考力の芽生え

数量や图形、
標識や文字などへの
関心・感覚



6月 水の流れが分かったよ!

排水溝の中におたまじやくしがいることに気付いた子どもたち。先生から「せせらぎに落とした葉っぱはどこに行くのかな?」と聞かれると、園内の排水溝を観察し、せせらぎとつながっていることを発見して友だちに伝えていました。

思考力の芽生え

言葉による
伝え合い



7月 みんなに発見を伝えたい!

おたまじやくしについて分かったことを話し合い、模造紙にまとめて飼育ケースの横に貼りました。うれしそうに発表する様子を見て、他の子どもたちも興味をもって真剣に話を聞いていました。

思考力の芽生え

言葉による
伝え合い



幼児教育

遊び

学びの芽生え

遊びを中心として、心と体を動かして、さまざまな対象と直接関わりながら総合的に学んでいく。

小学校教育

教科学習

自覺的な学び

幼児期に育まれた資質・能力を踏まえ、意欲をもって計画的に学んでいく。

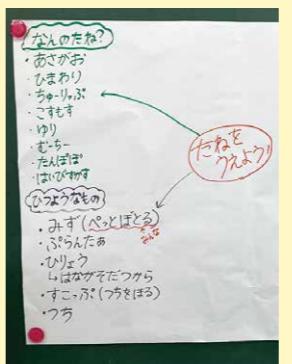
小学校教育 生活科(栽培活動)

5月 何の種かな?

種を観察し、栽培に必要なものを考えたり、色や形など、気付いたことをそれぞれメモしていきました。

▶先生のワンポイント!

種を観察したいという意欲を高めるため、「何の種かな?」と最初に皆で予想する時間を設定しました。



5月 種まきをしよう!

園ではどのように種をまいたのか、みんなで話し合いながらやってみます。分からぬ子は分かる子に聞きます。種の入った袋に直接水を入れた子もいました。

自立心

協同性



5月 アサガオはこうやって大きくなるよ

アサガオの双葉が開く様子に心を動かされた子どもたちは、言葉や絵だけではなく、体でも表現し始めました。指先や腕の動きまで意識し、体育の表現遊びへとつながっていました。

健康な心と体

豊かな感性と表現



5月 元気に育ってね!

「どれくらいの水をあげたらいいのかな?」と友だち同士で相談しながら水をあげています。水の中に入れた種から芽が出たのを見て、土がなくても育つのかという実験も始まりました。

協同性

思考力の芽生え



7月 遊んでみよう!

咲いた花を使ってどうやって遊ぶのか、みんなで作戦会議をしました。色水や押し花など、園での経験からやりたい遊びがたくさん出てきました。

協同性

豊かな感性と表現



9月 活動の振り返り

枯れたアサガオのつるで長さ比べ(算数科)をしました。活動後は、みんなでドキュメンテーションを作り、自分たちの学びを言葉にして共有しました。

数量や图形、
標識や文字などへの
関心・感覚

言葉による
伝え合い



幼児教育に学ぼう!

小学校でも生かせる
5つのポイント

△ここが大切!△
主体的・対話的で
深い学びに
つながるポイント

1. 単元展開のポイント!

幼児教育は活動の展開が柔軟であり、子どもの興味・関心に応じて発展していくことが特徴です。例えば、生き物を捕まえる活動の中で、小さな生き物も命をもっていることに気付いた子どもは、育て方を図鑑で調べたり、友だちと話し合ったりして学びを広げていきます。

△小学校でも!
子どもの思いを生かしながら、「やりたい」ことを教科の中に位置付けていくことが重要です。例えば、アサガオの栽培では、幼児期に経験した色水遊びや押し花作りをする活動などを取り入れることで、子どもの意欲を高めながら単元を展開していくことができます。また、図画工作科や国語科とも関連付けた総合的な学びにもつながっていきます。



2. 環境構成のポイント!

幼児教育では、子どもの姿から環境を構成します。例えば、園では生き物や植物への興味がより高まるように、図鑑や道具を用意したり、子どもと一緒に掲示物を作ったりしています。一人一人の興味・関心に合わせた支援によって、子どもの活動が広がっていくのです。



琉球大学講師 宮城利佳子

幼児期の教育は、おもちゃで遊んだり、歌ったり、運動したりなど、さまざまな体験を通して子どもの好奇心や探究心を育み、心身の発達を促すことを目的としています。

幼児は自ら環境と関わりながら、遊びを通してさまざまなことを学んでいきます。そのため、保育者は幼児が遊びを発展させたり、友だちと協力し合ったりできるよう、適切な環境構成や声かけなどの工夫を行っています。

ここでは、幼児教育の実践の中から、小学校教育においても活用できる5つのポイントを解説します。

1. 子どもの思いを生かした単元展開
2. 子どもの活動を豊かにする環境構成
3. 肯定的な声かけ
4. 多様な表現活動
5. 学びを可視化し、振り返りの機会をつくる



3. 声かけのポイント!

幼児教育では、子どもの気付きや発見を大切にしています。そのため、保育者は直接の教示や指示を控え、肯定的な声かけや対話を通じて、子どもが自分で気付くことができるような関わりを行っています。すべて保育者に頼るのではなく、子ども自身が考えたり、調べたり、友だちに聞いたりすることができるようなきっかけづくりをしているのです。

△小学校でも!
△

活動を始める前や活動中に、園や家庭での経験を想起させる声かけをすることで、子どもが考えを深めることができます。また、活動の中で「おうちの人に聞いてみるのはどうかな?」というような声かけをすることで、家庭にも活動の場が広がっていきます。保護者を巻き込んで活動を展開していくことも重要です。

4. 表現活動のポイント!

幼児教育では、言葉以外にも身体表現や造形表現を通じて思いを伝えることを大切にしています。例えば、見付けた生き物の動きを伝えたいときは、体で表現したり、絵を描いたり、絵本や図鑑、劇を作ったりします。こうした表現活動は、文字だけで伝えきれない感覚や発見を共有する手段となり、子ども自身が感じたことを深めるきっかけにもなります。

△小学校でも!
△

例えば、動物の飼育や植物の栽培で観察を行う際、絵と文章で表現するだけでなく、生長の過程を劇や動きで伝えるなど、様々な表現方法を取り入れるとよいでしょう。多様な表現を認めてることで、子どもの思いや考えを引き出し、楽しみながら学びをより豊かに広げていくことができます。



5. 振り返りのポイント!

幼児教育では、ドキュメンテーションやウェビングマップを活用し、子どもの遊びのプロセスを可視化しています。子どもたちは記録を見返しながら、自分たちの遊びを振り返り、次の遊びへつなげていきます。

△小学校でも!
△



写真:社会福祉法人知念福祉会 知念こども園、本部町立伊豆味幼稚園

つなげよう！育てよう！ 幼保小連携の進め方

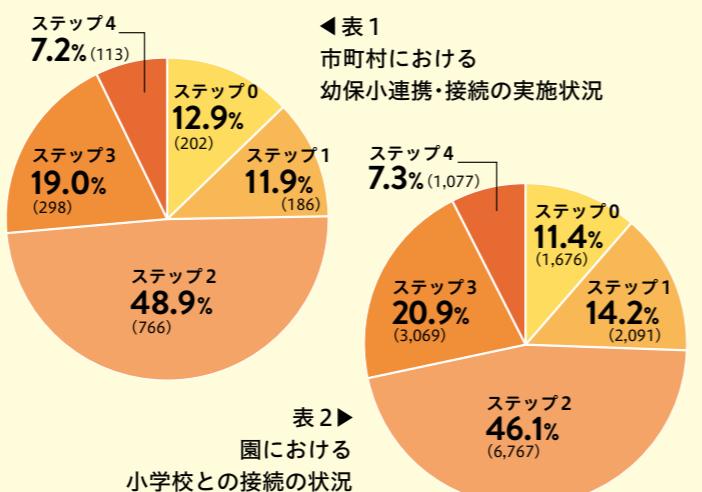
琉球大学講師 宮城利佳子

幼保小連携の今

近年、文部科学省は全国的に幼児教育センターや幼児教育アドバイザーの配置を促進し、各自治体の幼児教育推進体制の強化を支援しています。幼児教育センターは、都道府県では76.6%、市町村では5.6%に設置されており、幼児教育アドバイザーも都道府県の91.5%、市町村の47.5%に導入されています。また、架け橋期のコーディネーターについても、都道府県では83.0%、市町村では33.4%に設置されています。

さらに、幼保小の関係者が共に学ぶ機会として、都道府県単位(80.9%)や市町村単位(39.9%)での合同研修も各自治体で実施されています。しかし、現場の取り組み状況を見ると、「年数回の授業や行事、研究会などの交流はあるが、接続を見通した教育課程の編成・実施には至っていない(ステップ2)」の割合が最も大きいのが現状です。(表1、2参照)

幼児教育と小学校教育の円滑な接続を実現するためには、自治体、学校、地域がそれぞれの役割を果たし、連携を深めていくことが重要です。ここでは、幼保小連携をより効果的に進めるための具体的な方策について、自治体・行政、現場の先生、学校管理者の3つの視点から考えていきます。



ステップ0:連携の予定・計画がまだ無い。(無回答含む)
ステップ1:連携・接続に着手したいが、まだ検討中である。
ステップ2:年数回の授業、行事、研究会などの交流があるが、接続を見通した教育課程の編成・実施は行われていない。
ステップ3:授業、行事、研究会などの交流が充実し、接続を見通した教育課程の編成・実施が行われている。
ステップ4:接続を見通して編成・実施された教育課程について実施結果を踏まえ、更によりよいものとなるよう検討が行われている。

月刊 初等教育資料 2024年11月号、東洋館出版社、2024、p.6-9

自治体・行政の視点

自治体や行政は制度の大枠をつくり、小学校区ごとに幼保小連携を推進していくようにサポートする必要があります。

1. 関係機関の連携体制の構築

自治体は、幼児教育施設と小学校が協力しやすい環境や、小学校の教育内容に幼児期の遊びの視点を取り入れるための仕組みを整えることが大切です。例えば、幼稚園・保育所・こども園と小学校の合同研修会、公開保育や公開授業を定期的に開催し、教職員同士がお互いに理解を深める機会をつくるとよいでしょう。また、「架け橋カリキュラム開発会議」を設置し、地域の実態に応じたカリキュラムを作成していくようにします。

2. 保護者への情報発信と支援

幼保小連携を進めるうえで、保護者の理解と協力も欠かせません。入園・入学前の家庭に対して幼児教育と小学校教育のつながりに関する情報提供を行い、保護者が質の高い幼児教育について知ることができる機会をつくります。

3. 幼児教育アドバイザーの配置

幼保小の連携をより効果的に進めるためには、幼児教育アドバイザーの配置が重要です。幼児教育アドバイザーは、公私を問わず園や小学校を訪問し、幼児教育施設の質の向上や小学校の授業に幼児期の学びを取り入れるための伴走者としての役割を果たします。



現場の先生の視点

1. まずは教職員同士のつながり

まずは幼児教育施設と小学校の先生方がお互いの顔と名前を知ることが連携の第一歩です。信頼関係を築くことで情報交換がスムーズになります。また、年度が変わる際には丁寧に引き継ぎを行うことも忘れてはなりません。



2. 子ども同士の交流

入学前に園児と小学生が交流することで、園児は小学校生活への不安が和らぎ、安心して入学をを迎えられます。また、交流については、互恵性があるようにすることが大切です。交流の目的について事前に園と確認し、活動の振り返りも行うとよいでしょう。



▲園児と小学生が一緒に生き物を探しているようす

3. 保育者の指導方法を小学校教育に生かす

幼児教育の実践を理解するために、小学校の先生も公開保育に参加し、保育の意図や方法を学ぶことが有効です。小学校に合わせるために「こうしてほしい」と園に求めるのではなく、「園ではどのように対応していたのか」を知ることで、より効果的な支援を行うことができます。もし公開保育への参加が難しい場合は、園での子どもの様子を記録した動画や写真、ドキュメンテーション(保育の記録)などを活用し、保育者と話し合う機会を設定することも効果的です。こうした対話を通じて得た学びを、1年生のスタートカリキュラムに取り入れていくことが大切です。

4. 幼児期の経験と1年生の学びをつなぐ

1年生の指導計画や指導案には、幼児期の経験を記載し、子どもたちの学びの土台を意識した授業を計画することが大切です。

例えば、単元導入では積極的に園での経験を引き出すような声かけをするとよいでしょう。既習経験をもとに授業を構成することで、子どもたちが意欲的に学びに向かうことができます。小学校の活動も、幼児期の遊びとつながっていると感じられるような指導の工夫が重要です。



学校管理者の視点

学校管理者は、校内研修や職員会議で、全教職員が幼保小接続についての共通理解をもつことができる機会を設定する必要があります。1年生の発達の段階に応じた指導の工夫を学ぶことで、学校全体で1年生を迎えることができます。

1年生の学びを知ることは、2年生以降の教育の質の改善にもつながっています。また、朝の会などの機会を活用し、2年生以上の子どもたちにも「スタートカリキュラム」の考え方を説明することも効果的です。

1年生の学びを支えるために、子どもの思いに応じた柔軟な活動を担任教師が実施することを認めることが大切です。幼児期には主体的な遊びの中で学びが深まるため、小学校においても子どもが安心して活動できる時間や環境を確保し、学びの移行をスムーズにすることが求められます。

子どもの「面白がる」を生み出す 環境と人との関わり

生活科
1年

いろいろな材で「遊び込む」単元を構想し、
子どもの願いを実現する

神奈川県横浜市立高田小学校 高山希子

※本稿は、横浜市立東本郷小学校在籍時の令和6年度の
実践をまとめたものです。

きっかけ

見て見て、この石！

とある4月の朝の会。一人の子どもが、通学路で見付けたお気に入りの石を紹介してくれました。いろいろな形や模様の石に、子どもたちは興味津々。一人の子どもの発言がきっかけで、みんなで石集めをすることになりました。



この石の名前はね…

POINTS

幼児教育に学ぶヒント

遊びのきっかけは、子どもの「！」「？」から

幼児教育では、面白いもの見付けた！どうしたらしいだろう？いいこと思いついた！という発見、疑問、解決の「！」や「？」のプロセスを自分の好きな遊びの中で繰り返していくことで資質・能力を育んでいます。小学校の学習においても、子ども自らが疑問をもち試行錯誤して発見や解決できるような「！」と「？」を大切にしていくとよいですね。

吉永安里
国学院大學教授

石がたくさん集まつたよ！もっと遊びたい！

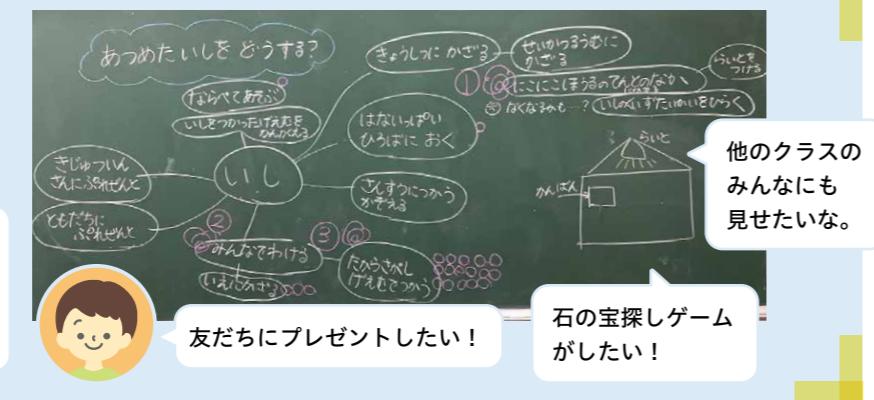
子どもたちが集めてきた石を、給食室からもらった卵パックに入れて、「石のコレクション」として飾ることにしました。すると、自然と子どもたちから「みんなにも見せたい！」「石でもっと遊びたい！」という声があがり始め、活動が発展し始めます。



先生の関わり

「もっと○○したい！」という思いや願いが高まるように、子どもたちの言葉を丁寧に拾いました。

たくさんの石が集まりましたね。集めた石をどうしましょうか。



石のはくぶつかんをつくろう (指導時期: 4~10月)

実践のねらい

身近な自然を利用したり、身近にある物を使ったりして遊ぶ活動を通して、遊びや遊びに使うものを工夫して作ることができ、その面白さや自然の不思議さに気付くとともに、みんなと楽しみながら遊びを創り出そうとする。

幼児期の経験・学び を意識した点

- 1 「遊びのきっかけ」
- 2 「遊びを広げるための手立て」
- 3 「学びを深める環境や人との関わり」

「石のはくぶつかん」をつくりたい！

教室前のスペースに、テントを置いたことから「石のはくぶつかんをつくろう」という活動が始まりました。



丸い石や平べったい石があるね。似ている形ごとに分けてみようよ！

◎ 算数との
関連

POINTS

先生の関わり 遊びの広がり

石という材への興味・関心・活動が自然と広がるように、テントを用意したり、常設の遊びスペースを設けたり、環境を工夫したりしました。ゴールを初めから決めずに、子どもと一緒に「やってみたい！」を考えるように意識しました。

飾るだけじゃなく、遊べるはくぶつかんにしたい！

「石のはくぶつかん」をもっと面白くするために、みんなでアイデアを出し合い、考えた遊びを模造紙に整理しました。それぞれの遊び場を常設し、いつでも遊べる環境を整えたことで、子どもたちにとって「遊びが日常化」しました。

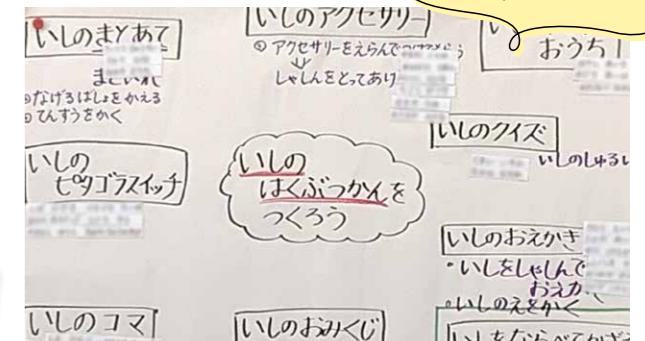
この石、図鑑に載ってる！石には名前があるんだね。

石のクイズ

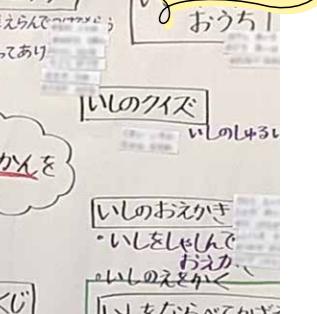


壁にくっつけて、コロコロコロコロ…みたいにしたらどうかな？

石のピタゴラスイッチ



石のはくぶつかんの
アイデア



石のお絵かき

石に絵を描きたいけれど、描いたら石が無くなっちゃう…

そうだ！タブレットで写真を撮って、そこに絵を描こうよ。

遊び自体や遊びに使う
ものを工夫する姿

◎ 図工との
関連

石のはくぶつかんに、みんなを招待しよう!

「石のはくぶつかん」にお客さんを招待して、一緒に遊ぶことにしました。年間を通して交流のある鴨居保育園の年長児、2年生、6年生にお客さんになってもらい、みんなで目いっぱい遊びました。

POINTS

先生の関わり 「切実な問題」をかける

多様な相手と関わる中で、子どもたちは相手に合わせたルールや遊びを自発的に工夫するようになります。願いを実現しようとする中で出会う「切実な問題」を自力解決するプロセスこそ、主体的な学びです。一人一人に学習課題をもたせるよう、意図的に場や環境をしかけました。

ようこそ! 石のはくぶつかんへ!

石のおみくじ



取りやすいように、箱を持ってあげるね。

石ちゃんのおうち



ここはお風呂だよ。
すべり台もついているんだよ。

お客様に合わせて、
相手が楽しめる遊びに
しようと工夫する姿が
見られました。

石のアクセサリーやさん



写真を撮って
あげるね。

石のまといれ



6年生がお客様のときは、
カップを小さくして
遠くに置こう。

両手を使って回すといい
よ。細くて、まっすぐな
石がよく回るよ。

石のこままわし



TOPIC

幼児教育に学ぶヒント

「学びの芽生え」を「自覚的な学び」につなぐ

小学校では、子どもたち自身が学習のめあてをもち、見通しをもって学んだり、振り返ったり、次の学習計画を立てたりする自覚性が求められます。一方で、遊びは何かの目的のためにするものではありません。幼児期の子どもは、遊びに没頭するうちに、気がついたら成長していた!という学びの芽生えの段階にあります。小学校以上の自覚的な学びにつながるように、架け橋期には、「○○したい!」という遊びや活動の見通しをもったり、友だちと一緒にイメージを共有したり、簡単な振り返りをしたりする経験を重ねていくことが大切です。



「遊び」を通した異年齢交流の価値

- 遊びを通して、園児に面白さを伝えたり、6年生から称賛の言葉をもらったりする中で、自然物がもつ魅力が、環境と人との相乗効果によって引き出されていました。
- また、相手に合わせて説明の仕方や言葉を工夫することで、言語活動も深まりました。



難しい問題だね。
すごいなあ。

石のクイズ



実践の成果と課題

成果

「子どもたちは、どういうものに興味をもつのかな?」「どうしたらもっと楽しめるだろう?」と考えながら、環境を工夫し整えていくことで、子どもたちの「面白そう!」「やってみたい!」という期待感が生まれ、探究活動が広がり、学びを深めることができました。興味・関心は一人一人異なりますが、「石」という共通の材を通して、みんなで『石のはくぶつかん』をつくる活動は、子どもたちにとつて大きな達成感へつながりました。

課題

ひらがなをようやく覚えたところだったので、発見したことや疑問に思ったことを文章に書き記すのが難しかったです。伝え合いは、主に振り返りの時間の話し合いとなったので、活動しているときの子どもたちの様子や会話を写真やビデオで記録し、説明する際に言語化できるように支援しました。



いしのはくぶつかんであそぼう
なまえ
9 がつ 30にち(けつ)



実践事例 1

いろいろな材で「遊び込む」単元を構想し、子どもの願いを実現する

—神奈川県横浜市—



実践のカギ

合同研修会の実施

本校では、近隣園・近隣校との合同研修会を行っています。幼保小合同のグループで、年長児・1年生の実践提案・報告を行い、印象に残ったことを共有したうえで、地域としてどのような子どもたちの姿を目指していきたいかについて協議を重ねました。



架け橋カリキュラム
デザインシート



園との交流

夏、秋、冬と年間を通して園との交流を行い、年間活動計画にも位置付けました。職員同士が定期的に連絡を取り合いながら、園での育ちを知ったり、園と学校の双方がお互いのカリキュラムについての情報交換を行ったりすることで、より子どもの目線に沿ったカリキュラムを作成することができました。



実践者紹介

高山希子

横浜市立高田小学校教諭

子どもが今、夢中になっていることや興味・関心を寄せていることから、遊びや学びを広げていくように心がけています。

校区の環境

※横浜市立東本郷小学校

計画的に開発された戸建てを中心とした街の中にある学校で、各学年3~4クラスの大規模校です。地域コーディネーターの協力もあり、多くの教育活動に地域の特色や人との関わりを生かしながら取り組んでいます。

また、日頃から保育所やこども園、幼稚園との交流も盛んで、この校区で育んでいきたい子どもの姿を共有して、子どもが主体の保育・教育を実践しています。

きっかけ

いいねこの曲！みんなで踊りたい！

朝や帰りの準備時間、休み時間に音楽をかけると、自然と踊り出す子どもたち。「園では○○の曲を踊ったんだよ」と経験を語りながら体を動かしていました。すると「みんなでこの曲で踊ろうよ」の声があがり、歌詞とリズムに合う動きをみんなで作ることになりました。

2年生と一緒に踊りたい！

1年生が作ったダンスと2年生が作ったダンスをお互いに見せ合うことに。「わたしたちも2年生のダンスを踊ってみたい！」との声から、2つのダンスと一緒に踊ることになりました。場所を移して、自由な並び順で教え合いながら取り組みました。

運動会でも踊りたい！

完成した2つのダンスを運動会でも踊りたいとの思いが出てきました。もっと楽しく踊るために、衣装を作ったり、運動場で隊形を考えたり…。
「○○したい！」という思いをつなぎ、学校行事にも広げたことで、子どもたちの生き生きとした姿が見られました。

次の1年生に

小学校のすてきを伝えたい！

1年間を通して、さまざまな対象と関わり、つながり広がって成長してきた子どもたち。1年間を振り返る中で、季節の遊びやおすすめを「次の1年生に伝えたい！」という声が。それらを季節ごとに巻物にまとめ、「この巻物、入学式で渡そうよ！」と、自分たちの声で活動を広げていきました。

新1年生を迎える準備



2学期

POINTS

幼児教育に学ぶヒント

プロセスを大事に

行事ありきで練習「させる」のではなく、例えば、園でリレー遊びから運動会のリレー競技に展開していくように、子どもたちのプロセスが大事にされています。



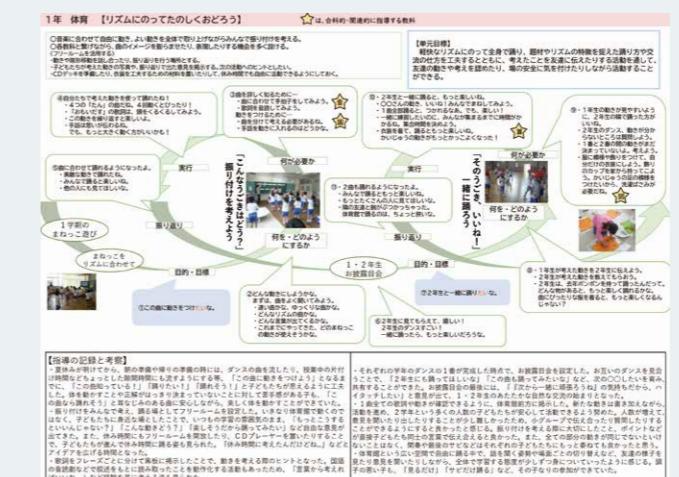
フリールームを活用して、踊りながらイメージを広げていく子どもたち。

成果

スタートカリキュラムの時期だけでなく、1年間という長期的な過程で子どもの力を育んでいくことができました。教師が一方的に指示・指導するのではなく、園での経験に目を向けて、子どもの力を信じることが大切だと感じました。子どもに委ねることは、勇気が必要な場面もありましたが、いつも力を存分に発揮して楽しさいっぱいに活動してくれる子どもの姿を見て、間違ないと感じました。

また、学習が本格的になる2・3学期でも、「学校、大好き！」と笑顔いっぱいで登校する子どもの姿が見られました。この取り組みが学校や学習への不安を取り除いてくれたと感じています。

実践のカギ



↑滋賀県版「学びのサイクルデザインシート(ぐるぐるシート)」
p.24のQRコードから、パワーポイントのひな形データをダウンロードできます。



実践者紹介

中川可奈

彦根市立城東小学校教諭

子どもの力を信じて委ねることを大切に、一緒に楽しみながら学びを広げていけるように努めています。



課題

「子どもの力を信じて、委ねる」という1年生で大切にしてきた考え方を、次の担任の先生へ十分に引き継ぐことが重要だと考えています。そのためには、学習内容や子どもの引き継ぎだけでなく、実践の記録を写真を用いて残しながら、心得までしっかりと伝えることが課題だと感じています。

教職員間の協力

校内研究を通して、全職員が園の保育参観に行ったり、かけ橋期の重要性について共有したりして、新しい取り組みへの理解を促すことができました。

TeamsなどのICTを活用しながら、活動の目的や支援を共有し、全校体制で取り組みました。

子どもの筋でのサイクル化

教師が決めた計画通りに進めるのではなく、子どもの「○○したい！」が生まれ、「そのためには○○したら…」が多様に試せるような授業を構造しました。子どもの実際に合わせて調整しながら進め、1つの経験の振り返りが次の学びにつながっていく意識を大切にしました。

3学期

POINTS

カリキュラムマネジメント

総合的に学びを深める

1年間を通して、各教科等の学習が、日々の生活や学校行事での経験と結びながら、総合的に学びが深まっていき、子どもたちもいっそくのめりこみ、手応えを感じていくという好循環が生まれています。



校区の環境

彦根市の市街地に位置し、各学年2クラス程度の小規模校です。毎年、10を超える幼稚園・こども園から子どもたちが入学してきます。校区は国宝彦根城の東部・南東部に広がり、古くからの仏壇街や自然豊かな木並木、優しさあふれる商店街などがあります。伝統と自然がある環境で、子どもたちが生き生きと学習しています。

子どもたちの 思いや願いの実現に向けて

生活科
1年

【遊びを軸にしたカリキュラムマネジメントの工夫】

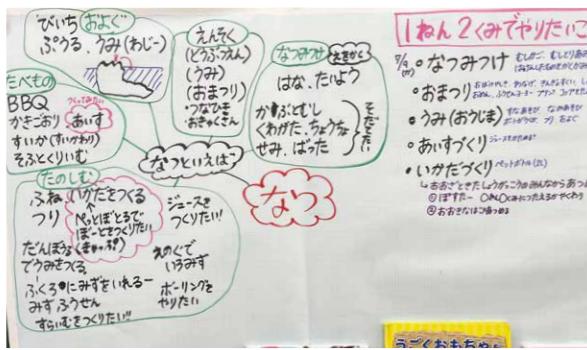
沖縄県南城市立大里北小学校 金城愛梨

きっかけ

園のとき、いかだに乗ったことがあるよ！

もうすぐ夏がやってくる！子どもたちに「夏といえば？」と働きかけると、自然物や食べ物、遊びなど、たくさんの夏のイメージがあがりました。夏のいろいろを振り返る中で、ある子どもが「園のとき、いかだを作って乗ったことがあるよ」と経験を語ってくれました。すると「何それ！？面白そう！」とみんな興味津々。「みんなでいかだを作って遊びたい！」ある1人の子どもの「○○したい！」という思いや願いが、クラス全体に広がり、いかだ作りを中心に活動が発展し始めました。

夏といえば？



導入の場面では、夏のイメージをウェビングマップを使って可視化し、「○○したい！」という思いを高めていました。

みんなでいかだを作って遊びたい！

いかだを作ることにした子どもたち。休み時間に図書室へ行き、いかだの作り方を探しに行きましたが、なかなか見付かりません。いかだの本を探す中で、さまざまなお本に出会い、「これもやってみたい！」と、いかだ作り以外にもやりたいことが広がります。「夏にやりたいこと」をいっぱい見付けては、そのたびに模造紙に書き足すようにしました。



ペットボトルで
作るのはどうですか？

POINTS

先生の関わり

経験を引き出す

園や家庭での経験を引き出してみると、経験したことのない子どもたちの「やってみたい！」につながります。子どもの経験を引き出しながら、夏の学習で、どんなことをしていかたいかクラスのみんなで意見を出し合いました。

大きないかだを作りたいな！
作り方が載っている
図鑑はあるかな？



きせつとなかよし 夏 (指導時期: 6~7月)

実践のねらい

夏の自然を見付けたり遊んだりする活動を通して、夏とその他の季節との違いや特徴を見付けたり遊びや遊びに使う物を工夫して作ったりして、夏の自然の様子や春から夏への変化、それを利用した遊びの面白さに気付くとともに、季節の変化を取り入れ自分の生活を楽しくしたり、みんなと楽しみながら遊びを創り出そうとしたりすることができるようになります。

幼児期の経験・学び を意識した点

- ①子どもたちの思いや願いを引き出した。
- ②園でも経験したことのないこと、園での経験を超えることを意識した。

環境構成の工夫



子どもたちが見付けた本は、教室にも配置し、子どもたちが自発的に意欲的に関わることができます。

POINTS

幼児教育に学ぶヒント

環境構成の工夫

幼児教育では、幼児が自発的・意欲的に関わることができるようになります。そのため、教師はねらいをもって環境を構成しています。また、幼児の興味・関心の変化に応じて、環境の再構成がなされます。



宮城利佳子
琉球大学講師

10, 20, 30...
10が10個で100。
100と100で...
全部で247個集まつたよー!!

どうやったら、いかだを作ることができるかな？

いかだを作るには、たくさんのペットボトルが必要だと知った子どもたち。学校全体を巻き込み、ペットボトルを集めることにしました。

POINTS

カリキュラムマネジメント

算数科「おおきいかず」

ペットボトルがたくさん集まると、子どもたちは全部で何本あるのか数えようとしています。最初はなかなか数えられませんでしたが、「10のまとまりをつくろう」と、ある子が数え方を思いつきました。みんなで協力して、身の回りにある物の数に興味をもち、数えることができました。

国語との関連

作戦会議



算数との関連



図工との関連

テープの強さや堅さなどを感じながら、「もっとしっかり巻こう」とみんなで確認。10個ずつテープで巻いたペットボトルを合体させ、大きないかだを作っていました。

試行錯誤を繰り返す子どもたち

架け橋プログラム相談室



素朴な疑問にお答えします！

Q & A



Q. 架け橋プログラムは、アプローチカリキュラムやスタートカリキュラムと何が違うのでしょうか？

A. アプローチカリキュラムは、文部科学省が公式に定めた用語ではなく、各自治体が小学校への接続を意識して、基盤となる資質・能力を育てるために行っている独自の取り組みです。一方、スタートカリキュラムは小学校入学当初に実施され、幼児期の遊びや生活を通した学びを基礎として、子どもが主体的に自己を発揮し、新しい学校生活を創り出していくためのものです。

これらに対し「架け橋プログラム」は、年長と1年生の2年間を「架け橋期」と位置付け、幼保小の教職員が共通の視点で協働し、子どもの育ちと学びを円滑につなぐことを目指す、全国的に推進されている取り組みです。（宮城先生）

Q. 架け橋プログラムに取り組むためには、まずは何から始めればよいでしょうか？

A. 架け橋プログラムに取り組むためには、まず管理職がその重要性を理解し、組織として取り組む姿勢を整えることが出発点となります。そのうえで、関係者がお互いの教育内容や子どもの育ちの様子について、情報を共有し、共通理解を深めることが大切です。

そのためには、幼稚園・保育所・認定こども園と小学校の教職員が、お互いに連携担当を決め、顔の見える関係を築く必要があります。幼保小が協働して目指す子ども像や方向性について考え、子どもの育ちを中心とした対話を重ねることで、相互理解と連携が深まっていくのです。（宮城先生）

Q. 幼保小の連携や異年齢の交流活動をしたいのですが、どのように進めればよいでしょうか？

A. 異年齢の交流活動を進めるには、まず園と小学校の教職員が一緒に指導案を作成し、活動のねらいや内容、子どもの実態をもとに、お互いの考えをすり合わせることが大切です。どちらかが無理をするのではなく、お互いにとって学びのある、互恵的な関係づくりを意識しましょう。さらに、活動後には子どもの姿を共有し、次のよりよい実践につなげるための振り返りを行うことが重要です。（宮城先生）

Q. 「幼児の終わりまでに育ってほしい姿(10の姿)」を受けて、小学校では何を意識して指導すればよいでしょうか？

A. 幼児教育は、ただ子どもを遊ばせているだけではありません。

「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を手がかりにして、幼保小の先生が子どもの姿の事例を通して具体的に対話することで、小学校の先生も子どもの学びや育ちを捉えることができます。

子どもがどんな環境の中で、どんなふうに育ってきたかを知ることができれば、園と共通することを感じさせ、学校への安心感につなげる環境を整えることもできます。また、「何もできない1年生」ではなく「いろいろなことができる1年生」と子ども観を転換することで、支援の仕方も変わってくるでしょう。そして何より、子どもたちをかけがえのない存在として捉え、一人一人のよりよい成長を願う気持ちを持ち続けることが大切です。（久龍先生）

Q. 生活科の授業づくりにおいて、幼児期の学びや育ちをどのように生かしていくべきでしょうか？

A. 子どもは、これまでに身の回りの人、もの、ことと豊かに関わり、夢中になって遊ぶ中で、さまざまなことを感じたり考えたりしてきました。ときにはそれらとの関わりの中でうまくいかないこともあったでしょうが、どうしたらよいかと考え、試行錯誤しながら自分なりに解決しようとしてきました。

そんなふうにして遊びの中で育まれてきた資質・能力が、授業の中でも発揮できるようにしていくことが大切です。

「園ではどうだった？」と幼児期に体験したことを想起させたり、一人一人の思いや願いを授業に生かしたりすることで、子どもはそれまでに培った学びを生かしながら、主体的に学びに向かっていくでしょう。（久龍先生）

ご回答いただいた先生



宮城利佳子先生
琉球大学講師



久龍和巳先生
徳島県阿南市立見能林小学校教頭



幼保小 をつなぐ
架け橋プログラム
ハンドブック